

# すぎなみ産

創刊号

2017

平成29年10月発行

りつハルトムルトおんたね  
靴職人

中野のりつハルトムルト  
靴職人

仕事いろいろ  
チャンピオンが集まる  
卓球場が会社の中に?!

新のりつハルトムルト  
靴職人

日本共産党  
油築町

## 発見! 住んでる街のこんな会社

キーワードでつながる 杉並のすごいこと「技」

もっと知りたい すぎなみのこと

すぎなみオススメ食堂



# 杉並から 羽ばたくバタフライ

## 世界で圧倒的シェアを誇る 卓球メーカー「株式会社タマス」

住宅地の多い杉並区に世界的な会社があることを知っているだろうか。オリンピックのメダリストを支え、ホビープレーヤーたちにも楽しみを広げ続ける。好きが高じて何とやら。卓球を一筋に極めて、今やその道ナンバーワンの実力派。株式会社タマスの強さに迫る!



卓球のラケット。一枚板による単板と、複数枚を貼り合わせた合板がある。そこにグリップと呼ばれる持ち手をつけ、ゴムのシートとスポンジが合わさったラバーを貼って出来上がる。



開発に10年かけた革新技術スプリング・スポンジが使われたラバー「テナジー」シリーズ。世界卓球2017デュッセルドルフ大会では55%の使用率を獲得した。大きな気泡がボールをつかみ、スピードと回転力を生む。

社会科見学や学校の卓球部に所属する生徒の見学もある。約1時間コースで、バタフライ卓球道場や史料コーナーなどを見学できる。公的な団体であれば電話で受け付けを行っている。



バタフライというブランド名から、蝶をモチーフにしたロゴマーク。現在のものは2014(平成26)年にリファインされた。卓球に深い造詣を持つデザイナーにより、蝶が飛び立つイメージが表現された。



トップ選手と共同開発したプロモデルも販売。写真中央のラケットは福原愛モデルで、新発売を祝して本人が直筆でサインした貴重品。

### 企業情報

- 会社名: 株式会社タマス
- 所在地: 〒166-0004 杉並区阿佐谷南1-7-1
- 代表取締役社長: 大澤卓子
- 設立: 1950(昭和25)年
- 卓球用品製造販売
- TEL.03-3314-2111(代表)
- <https://www.butterfly.co.jp>





# 杉並に68年

## 卓球界のリーディングカンパニー

卓球に触れたことのある人なら、  
バタフライという名前を知っているはずだ。  
テレビなどで試合を見て、左右対称の楕円が並ぶ  
印象的なロゴを目にした人もいだろう。  
バタフライブランドで、業界を牽引するタマスとは  
どのような会社なのだろう。

1956(昭和31)年、  
東京に移した  
本社に掲げた看板。



阿佐谷と高円寺のあいだに、馬橋という町名があった。今も神社や学校、交差点などに名前が残る。

1949(昭和24)年、この馬橋3丁目、現在の阿佐谷南で、新たなスポーツメーカーが産声を上げようとしていた。タマス運動具店の東京出張所。翌年、株式会社化された。

それが、現在、卓球界で圧倒的な世界シェアを誇る企業、株式会社タマスだ。

タマスは、バタフライというブランドで卓球用品を製造販売する。今日、年間60万本の卓球ラケットと100万枚のラバーを世界に販売している。

### 花である選手に寄り添う蝶として

杉並区馬橋は、山口県柳井町(現在の柳井市)で開業したタマス運動具店が、東京に進出するにあたって、創業者・田舛彦介の親戚の伝手を頼って、見つけた場所だそう。

1952(昭和27)年には馬橋2丁目の青梅街道沿い、現在の本社がある土地に移転した。当時はまだ地下鉄は走っていないが、青梅街道には路面電車、都電杉並線が走っていた。

往來も激しいこの場所で、タマスは卓球の振興と発展のために用具の製造を始めた。1954(昭和29)年には杉並の社内にラケット自家生産工場も建築した。創業の頃から、マーケティングをはじめ、研究開発、製造、販売までを一貫通貫でやっていることがタマスの特長のひとつ。

そして、何よりの強みがタマスの姿勢だ。

それは、ブランド名に表されている。バタフライという名は「選手を花にたとえるならば、私たちはその花に仕える蝶でありたい」という創業者の思いから。

選手に奉仕する姿勢は現在も変わらない。

たとえば最近では、2016(平成28)年のリオデジャネイロオリンピックで銅メダルを獲得した水谷隼選手。彼はタマスのアドバイザースタッフ(契約選手)だ。タマスは彼が小学生の頃から用具面でのサポートを行っている。また、水谷選手がドイツ留学をした際にはその手続きやチームの紹介なども行った。タマスには杉並区の本社以外に、現在の生産拠点である埼玉県所沢市の事業所と、ドイツ、中国、韓国、タイの4か国に現地法人を持っているため、そのグローバルなネットワークが活かされたかたちだ。

契約する世界のトップ選手からの声は、バタフライの研究開発に採り入れられていく。数値では表せない感覚的な要望なども用具に反映させる。

### 一分野に特化することによる地力

タマスは「卓球という小さな井戸を深く掘り続ける」ということを創業時からの企業テーマとしてきた。企業はともすれば多角経営に走るが、タマスは卓球だけを突き詰めた。ラバーやラケット、ボールに卓球台、ウェアやシューズ…ラバーだけでも約50種。売上目標を掲げるより、良い用具を作り、卓球というスポーツを発展させることを目指した。

世界卓球2017でのバタフライラバーの使用率は58.1%。ここ9年、5割を下回ったことはなく、2位以下に圧倒的な差をつける。

変わらず同じことをやり続ける強さ。

選手に奉仕する姿勢が、今日もバタフライを世界へ羽ばたかせる。



杉並区馬橋に設立された当時の本社社屋。

## 社員に聞きました

社員の顔は、会社の顔。実際に働いている方に、働き方や仕事のやりがいなどを聞いてみました。



御社の良いところって何ですか?

総務チーム 阿佐谷総務担当  
村上 隆さん

——社内に卓球の経験者はどのくらいいるのでしょうか?

阿佐谷にある本社はほとんどが卓球経験者です。触れ方はいろいろですね。中学時代だけやっていた人もいれば、オリンピックに行った選手もいます。私は大学までやりましたし、直属の上司は現役時代に日本チャンピオンでした。

——卓球好きが集まった会社なのですね。

卓球を長く続けている方であれば一度はバタフライ製品を使ったことがあると思います。皆さん、知った上でやってくる。採用試験でも、100人いれば、卓球をやっていない人は1人か2人です。

——やりがいはいかがですか。

私自身はタマスの社員でいることは、名誉というか天職だと思っていますね。好きな仕事に就ける人って世の中にごく僅かだと思いますし。私は入社後5年間、営業にいて、その後、現在の総務に来ました。様々なことをやりますが、こうして卓球用具に囲まれているだけですごく嬉しいんです。

### 一流プレイヤーの身近に寄り添う

——扱う用具も多く、第一線の選手たちも使っていますよね。

当社の製品を使った世界チャンピオンが誕生することや、アドバイザースタッフ(契約選手)の張本智和選手たちが活躍していたりするのは、すごく嬉しいことです。選手が会社に来てくれることも頻繁です。

リオデジャネイロオリンピックが終わってすぐに、水谷隼選手が会社に来てくれたり、世界卓球の混合ダブルスで金メダルを獲った吉村真晴選手が卓球レポートの取材で来てくれたりもします。

——日本選手も強くなりましたよね。

強くなったことで変化はありましたか?

強くなって、これまで以上にマスコミが取り上げてくれるようになりました。それで卓球のイメージが大分変わったな、という印象がありますね。

最近、町の体育館などに誰でも使える卓球台が置いてあります。そこで貸し出し用のラケットを使っている人が増えたんです。昔からやっている我々は自前のものを持って行くので、それを見ると本当に変わったと思います。

### 卓球という共通のコミュニケーション

——そういった話題は社員同士でされますか?

はい。選手が活躍した翌日などは必ずと言っていいほど話題にあがります。たとえば、張本選手の勝利に、みんなで盛り上げられる。卓球という共通のコミュニケーションがあることが、当社の強みです。

社内には、卓球をやりたい社員のために卓球部を作っています。結構、終業後も練習しているんですよ。私は飲みに行くよりも、同僚と一緒に卓球をする機会の方が多いですね。

——社員皆が卓球でつながっているんですね。

それが当社なりのコミュニケーションです。だから、社員同士の仲がすごく良いですよ。



社内の卓球部はクラブチームの全国大会にも出場。上位進出を目指して日々汗を流す。

### ■タマスの歩み

1946(昭和21)年	山口県に田舛彦介が「タマス運動具店」を開業	1967(昭和42)年	埼玉県所沢市に工場完成
1949(昭和24)年	杉並区に「タマス運動具店東京出張所」を開業 バタフライ卓球用品ラバーおよびラケットを発売	1973(昭和48)年	西ドイツ(現ドイツ)に現地法人設立
1950(昭和25)年	株式会社タマスを設立(当時の本社は山口県)	1983(昭和58)年	本社横にバタフライ卓球道場が完成
1952(昭和27)年	現本社所在地に東京出張所を移転。東京支店と改称	1997(平成9)年	世界初のハイテンション・ラバー「ブライス」を発売
1954(昭和29)年	東京支店内にラケット自家生産工場を建築	2003(平成15)年	中国に現地法人設立
1956(昭和31)年	本社を東京に移す 本社にラバー加工工場を建築	2008(平成20)年	スプリング・スポンジを搭載した「テナジー」シリーズを発売
1957(昭和32)年	卓球レポート創刊(当時の名称は「バタフライ・レポート」)	2009(平成21)年	韓国に現地法人設立 世界卓球2009横浜用具スポンサー(以来、2016年までに7度)
1959(昭和34)年	杉並区荻窪に倉庫を設置(昭和40年ごろまで使用)	2014(平成26)年	タイに現地法人設立
1964(昭和39)年	本社ビル完成	2016(平成28)年	大澤卓子が5代目社長に就任



# 会社の中に卓球場?!

## チャンピオンたちも訪れる“卓球の聖地”をレポート

杉並に続々と卓球選手が訪れる?

数々の名プレーヤーが足を踏み入れたという、

卓球の聖地がタマスの地下に。

かと思えば、ホビープレーヤーたちもラケットを振る憩いの場。

真剣アツド笑顔。バタフライ卓球道場を紹介!

「ここに来たことがない卓球チャンピオンはいないんじゃないでしょうか」

案内されたのは、バタフライ卓球道場。地下2階に卓球台が8台並ぶ、卓球専用の施設だ。1983(昭和58)年4月に、12億円をかけて建設された。製品開発や技術研究のため、床材や照明も競技に合わせたものになっている。

天井を見上げると、それがよく分かる。建設当時は、社員に元世界チャンピオンが2人いた。彼らの技術を多角的に解析できるよう、頭上から卓球台を撮影できるように設置したカメラが天井に残されている。

現在も水谷隼選手や、若手として期待の高い張本智和選手などが訪れるなど、国内外の一流選手が集まる。タマスが1957(昭和32)年に創刊し、今年で60周年を迎えた卓球専門誌「卓球レポート」の取材撮影などもここで行われている。

### 卓球を広く楽しむ場としても

落語家を中心に集まった「らくご卓球クラブ」の活動もバタフライ卓球道場が拠点となっており、今年で30周年を迎えた。恒例の新春初打ち会、2017年は落語家の三遊亭小遊三さんやフリーアナウンサーの福澤朗さんなどが集まった。

かと思えば、バタフライ卓球道場は区民の憩いの場にもなっている。長らく杉並区卓球連盟の活動に協力している



2階には50人を収容できる畳敷きの広間。大学チームなどの合宿に利用される。



天井のカメラは、選手たちの技術解析に使われてきた。

堂々とかかる「卓球道場」の文字。

ほか、杉並で卓球クラブを運営しているチームに貸し出している。2階には50人を収容できる畳敷きの広間があり、長期休暇のシーズンなどは全国から大学チームなどが合宿に利用する。

バタフライ卓球道場は団体に限り予約制で貸し出し、多いときは年間1万人の利用があるという。

### ラケットを振れば皆が笑顔

これらはすべて無償だ。建設当初から現在まで利用料は取っていない。大型の施設だけに、毎年の運営費は1,000万円を超える。赤字だという。

それでも続けるのは、創業者の理念が受け継がれているからだ。卓球で得た利益は卓球界に還元したい、卓球を頑張っている人を応援したいということがバタフライ卓球道場の意義だ。

取材当日、バタフライ卓球道場には日中から汗を流す60歳以上の団体利用者がいた。年齢も性別も関係なく楽しめるところが卓球というスポーツ。雨天でも関係ない。卓球の懐の深さが、老若男女の笑顔を生み出している。



団体に限り予約制で貸し出し。多いときは年間1万人の利用がある。

## The Future 企業が向かう未来

# 卓球を広げていきたい タマスが描く未来

創業以来、卓球一筋で業界を変えてきたタマス。これからも、その歩みを共にする仲間たちと、ただひたすらに卓球へ貢献していく。

好きなことを広げていく。

人によって、それはちがう。タマスにとって、それは卓球だった。

「卓球という小さな井戸を深く掘り続ける」とタマスは掲げる。そこには2つの視点がある。

### シーズがニーズを超える

1つは創造という視点だ。

選手のニーズに応えることはメーカーの役割だが、一方でメーカーが育んだ技術というシーズから生み出した製品によって業界が沸き立つことがある。

競技レベルの卓球では、強打したボールの初速は時速100キロ以上出ると言われ、いかに速く飛ぶかが求められた。

そこにタマスはちがう提案を考える。

速さを維持しながら回転を高められないか。独自に10年かけて研究を重ね、革新的なラバー「テナジー」を世に送り出す。小さなスイングでも強い回転がかかり、発表されるや一気に主流へと躍り出た。

今後も選手が想像していないものを作り、競技性の向上をタマスは目指す。



### 世界をつなげるスポーツとして

2つ目は啓蒙という視点。

公益財団法人日本卓球協会によれば、加盟団体による登録人数(競技者レベルの卓球人口)は1979(昭和54)年の51,959人から、2016(平成28)年には333,567人と右肩上がり6倍に増えている。

タマスは、トップ選手による講習会を行っている。高いレベルのプレーを目の当たりにできることもあって人気がある。東日本大震災が起こった2011年以降は、東北を勇気づけるべく頻繁に出向いた。トップ選手たちも意欲的に参加し、海外の選手たちも非常に協力的だったそうだ。

### 好きなことを仕事にする

今、タマスでは若い社員が増えているという。

歴史を経た会社だからこそ、幅広い世代がいて、それぞれに背景がちがう。若い世代では皆がシェークハンドだが、団塊の世代ではペンホルダーが多い。世代がちがえば、道具がちがう、戦うスタイルがちがう。けれども、卓球が好きだという思いは同じだ。好きであるということは強い。

タマスは、卓球が好きだという人にはこれ以上ない職場だ。タマスが70周年を迎える2020年には、東京オリンピック・パラリンピックが開かれる。その頃には、卓球というスポーツに真摯に向き合ってきた企業の思いに、また新しい熱意が加わっていることだろう。

### 杉並の星

### 選手兼社長?! タマス創業者「田舛彦介」



田舛彦介が株式会社タマスの前身、タマス運動具店を開いたのは1946(昭和21)年、26歳のとき。当時、彦介は日本ランキング2位の卓球選手でもあった。選手として、彦介自身、卓球ラケットに貼るラバーはイギリス製のものを進駐軍に頼んで手に入れて使っていた。しかし、「これでは将来的に日本の卓球界のためにならない」と一念発起。卓球用品の製造開発にとりかかる。この思いが、バタフライ卓球用品の始まりだった。愚直に突き進み、今日では日本どころか世界がタマスの用具を使う。彦介が遺した「努力」それはここに集う者の合言葉である。」というメッセージ。そこには、卓球という道を極めるというストイックな姿勢が垣間見える。



彦介の「努力」という揮毫(きごう)が来場者を迎える。



意外に感じる人も少なくないようですが、実は杉並区では古くから様々な産業が発展しています。日々、区内のあちこちで多彩な事業(しごと)が営まれ、地域や日本の経済を支えているのです。このコーナーでは、共通のキーワードに関連する「杉並区のスゴいしごと」の一例を紹介。今回は、熟練の「技」で選りすぐってみました。

## 天草製作所 (あまくさせいさくしょ)

革が化ける醍醐味に魅せられ、脱サラして修行を重ね靴職人に



靴・カバン修理の1号店から数十メートル先に、注文靴や革小物を製造販売する2号店も開業。2号店では、火・木・土に靴作り教室(受講料:月4回で1万2000円、入会金:3万円)も開催している。2017(平成29)年8月には、新宿に修理専門の3号店もオープン。



どの街でもよく見かける大手チェーンよりも、小規模経営の個性的な店がはるかに目立つ西荻窪。オーダー靴や各種革製品の製造・販売・修理業を営む天草製作所も、ニューヨーク郊外を意識したという異国情緒溢れる店構えで、この街に独特の彩りを添えている。2013(平成25)年12月に同店をオープンさせた西森真二さんは、16年間にわたって広告代理店で働いてきた。だが、「地べたに這いつくばって社会を見つめ直してみたい」と思い立ち、会社を辞めて路上で靴磨きを始めた。以来、次第に靴に魅了されていった西森さんは長い下積み・修行を経て、職人としての腕を磨いた。そして、久我山に住んでいたこともあり、比較的隣で街並みも魅力的だった西荻を開業の地に選んだ。

「靴という字は、革が化けると書きます。1足の靴を完成させるまでに30種類以上の道具を使いますし、作り手によっていろいろな仕上がりに変わるところが非常に奥深いです」

実際に靴を手に取りながら、西森さんはその魅力について熱っぽく語る。靴を包み込むように握り締めるその手には、いかにも職人らしい無骨さと繊細さがにじみ出ている。

### ①1号店 靴・靴修理 Repair Shop

- 所在地:〒167-0053 杉並区西荻南2-7-5 1F
- TEL&FAX:03-3334-6822
- 営業時間:10:00~20:00(日・祝は19:00まで)
- 定休日:水曜日
- ②2号店 注文靴・革小物・靴作り教室 Factory Shop
- 所在地:〒167-0053 杉並区西荻南2-6-6 1F
- TEL.03-3334-7700 FAX.03-3334-7500
- 営業時間:11:00~20:00(日・祝は19:00まで)
- 定休日:水曜日
- https://www.amakusafactory.com/



## タクミ製作所 (たくみせいさくしょ)

木々の個性がファッションブルに世代もつなぎ、かごを編み上げる



かごを実際に見られる場所として、かごバッグ専門店、かごやをオープン。素材ごとに異なる色味のほか、縦横に編まれた網代編から花を模した花編などの編模様をのびに楽しめる。やまぶどうのかごは2万円台。かごが日本と中国の職人たちと連携をとる商品が並ぶ。



日々の買い物で、白く無機質なビニール袋がエコバッグに代わられることも増えた。何度でも長く使えてオシャレ。タクミ製作所が一つずつ手で生み出す、かごは、そんな期待に応える。年配の方向けという印象も強かったかごに、100種以上のデザインバリエーションをそろえ、今では若者も興味を示す。

代表取締役の阿部幹男さんが阿佐谷で、せいろを中心としたキッチン用品の販売を始めたのは1972(昭和47)年。飲食店に商品を卸していた。

現在の代表商品である、やまぶどうのかごを売り始めたのは約15年前。やまぶどうは三代にわたって使えると言われるほど丈夫な素材だが、車も通れない山奥でしか入手できない。丈夫な分だけ固く、なめして柔らかくしても、クセを読まずには上手く仕上がらない。「技術がないと、きっちりしたかごは編めません」

阿部さんは30年ほど前に中国で自社工房を建て、減っていた日本の職人技術を現地の職人に伝えた。今では彼らの子どもが働いている。

「良い物を作れば売れる。他にない物を作り出す精神が必要じゃないでしょうか」やまぶどうのかごは使い続けると、艶のある艶色になる。世代を超えた技術が味を生む。

- ①本社
- 所在地:〒166-0004 杉並区阿佐谷南3-44-10
- TEL.03-3393-5950 FAX.03-3391-0211
- http://www.takumi-mfg.co.jp/
- ②かごバッグ専門店
- 所在地:〒166-0004 杉並区阿佐谷南3-38-22
- TEL.03-3393-4741 FAX.03-3393-5890
- 営業時間:11:00~17:00
- 定休日:月曜日・土曜日・日曜日・祝日



## 紳士服 大萬 (しんしふく だいまん)

美しいシルエットと着心地を追求して紳士服作り一筋、創業87周年



ハンドメイドのスーツは12万8000円～、イージーメイドは3万8000円～(税別)。サイズに合った型紙を選んで仕立てるパターンオーダーに対し、個別に採寸して1着ごとに裁断するイージーオーダーは、比較的割安なのにフィット感が抜群。尾崎さんは宿町商興会の会長も務めている。



最近のメンズスーツは、Y体、A体、B体、AB体といったサイズから自分に合ったものを選ぶ既製服が中心。けれど、体型には個人差があり、本当に着心地の良いスーツは個別に採寸して仕立てる服だ。社会人にとってスーツの着心地は重要だ。今年で創業87周年を迎えた「紳士服 大萬」ではハンドメイドが中心で最近では時代のニーズに合わせリーズナブルなイージーメイドにも力を入れている。

「イージーオーダーは、念入りな体形把握と採寸の後、1着ごとに裁断します。このため、パターンオーダーと比べて身体によりフィットした着心地抜群のスーツが出来上がります」(大萬代表の尾崎永治さん)

1930(昭和5)年に初代仙蔵氏が創業した店を1959(昭和34)年から受け継いだ尾崎さんは紳士服作り一筋で、2010(平成22)年には「杉並区技能功労者」として表彰された。「今の若い人たちは元気とやる気と勇気で様々なことに挑んでほしい」と願う尾崎さん自身、60年近くもそれを実践し続けて匠の技を習得した。

「スーツの納品翌日に同じお客様から追加注文を頂戴した際は感慨ひとしおでした。奥様や職場の人に好評だったとか」と語る尾崎さんは、満面の笑みを浮かべていた。

- 所在地:〒167-0034 杉並区桃井3-1-16
- TEL.03-3399-2430
- 営業時間:9:00~21:00
- 定休日:毎月1日・10日・20日





# もっと知りたい すぎなみ のこと



最高級顔料をふんだんに用いて高級乾性油で練っており、永く艶やかさを保つ松田油絵具のスーパー油絵具。



熟練の技術者たちが年季の入った機械を巧みに操作しながら、品質の高いこだわりの絵具を生み出す。



「油絵具の市場は縮小するばかりですよ……」と自嘲気味に語りつつも、製品に対するこだわりと愛着が表情の端々からにじみ出てくる3代目社長の浅田さん。新たな製品が生み出されるまでには、様々な調合が試みられ、何度も試作が繰り返される。こまめに修繕された年代物の機械は今なお現役で、ロングセラー製品などを生産し続けている。工場で働く技術者には美大出身者など、絵をこよなく愛する人たちが多くいる。

## 作家の声に応じて国産の 油絵具を生み出し、 65年にわたって 日本の洋画界を陰から支える

### 松田油絵具株式会社

油絵具はアクリル絵具と比べて色彩が豊富で深みもあり、色褪せにくい。そして何より、ルネサンス期から油絵は絵画技法の中心に位置づけられ、非常に長い歴史を誇る。油絵具の国産メーカーとして、日本の洋画界を陰から支えてきたのが松田油絵具だ。3代目の社長を務める浅田雅司さんはこう説明する。

「群馬県出身の先代社長が杉並で1940(昭和15)年に創業し、その8年後に当社を設立しました。近くに美術学校があったことから、当初は使用済みの絵具チューブの回収などを手掛け、やがて作家のアトリエも訪ね歩くようになりました。すると、『絵具を作ってみないか?』と話をもちかけられたのです。そこで、油絵の大家である故・山下新太郎先生、故・岡鹿之助先生からご指導を賜りながら、試作を重ね、1952(昭和27)年に誕生したのがマツダ・スーパー油絵具です」

時間が経過しても変色・退色が進みにくいことから、文化勲章を受賞した大家も愛用するなど、同社の油絵具は好評を博した。一方、アクリル絵具を否定していたわけではなく、実はその国産第1号は1967(昭和42)年に松田油絵具が発売したものだ。日本が高度経済成長を遂げて先進国の仲間入りを果たすと、国民の文化に対する関心もおおのずと高まった。それに伴って同社も

- 設立: 1948(昭和23)年11月25日
- 代表者: 代表取締役社長 浅田雅司
- 事業内容: 油絵具、画用液、アクリル絵具の製造
- 本社: 東京都杉並区善福寺2-5-2(焼失により現存せず)
- 商品センター・工場: 埼玉県狭山市新狭山1-5-8
- TEL.04-2900-1700 FAX.04-2900-1707
- <http://www.matsuda-colour.co.jp>

売上を伸ばしたが、日本が豊かになって趣味が多様化するにつれて、次第に頭打ちとなったという

「80年代末のバブル期には絵画が高値で取引されましたが、絵具まで売れたわけではありません」

創業者の孫を妻に迎えていた浅田さんは、2007(平成19)年に2代目の義父から社長職を託された。

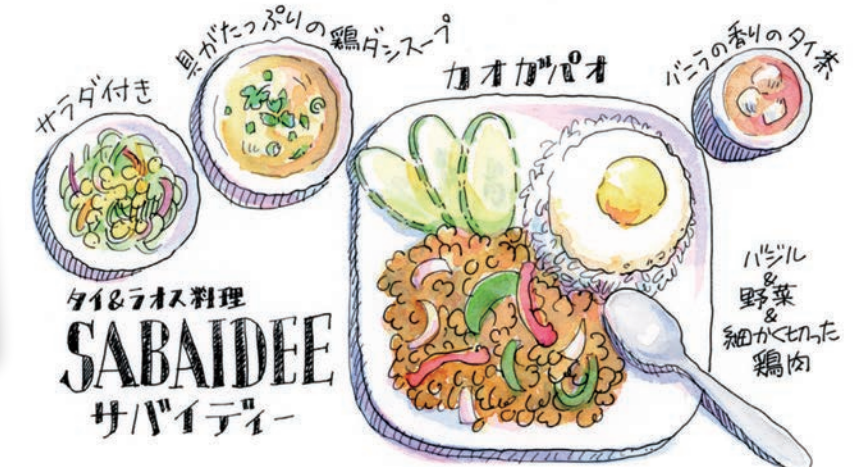
「もはや儲かる商売とは言いづらいが、文化を支えて社会貢献しているという気概はあります」

災難にも遭遇した。杉並の本社が火災で焼失したのだ。現在は埼玉県狭山市の工場内で指揮を執る浅田さんだが、本社所在地の登記はあえて変更していない。

「創業者の実子である先代はそれほどでもないのですが、私自身は杉並の本社があった場所に執着しています。いつの日かそこにギャラリーを建てて、作家のみなさんが集まる場所にしたいと思っています」

顔料をはじめとする材料にこだわり、熟練技術者の手作業による行程も交えながら、今も松田油絵具は大量生産では困難とされる高品質の製品を世に送り出す。そして、自らが作り手である一方、2013(平成25)年からフランスの老舗水彩絵具メーカーであるセヌリエ社の日本総代理店も務めている。今まで絵をたしなんでいた人はもちろん、先々で美術に興味を抱くようになる人も、松田油絵具と何らかの接点があるかもしれない。

すぎなみ  
オススメ食堂  
本誌P.7で紹介した  
「タクミ製作所」の  
スタッフのオススメ!



## 他ではなかなか味わえない ラオス料理と人気のタイ料理を阿佐谷で

店名の「サバイディー」は、タイ語で「元気」、ラオス語で「こんにちは」。ランチメニューの一番人気は、カオガバオ(鶏肉とバジルのご飯)。11月で開店して3年。本場そのままの味に、近所で働く人はもちろん、故郷を懐かしむ杉並在住のタイ・ラオス出身の人たちで賑わっています。

- 所在地: 杉並区阿佐谷南2-17-2 S&K 1F
- TEL.03-6383-2566
- 定休日: 無し
- <http://sabaidee-restaurant.com>



**杉並区産業振興センター**  
〒167-0043 杉並区上荻1-2-1 インテグラルタワー2F  
TEL.03-5347-9077(中小企業支援係)

杉並区内産業のさらなる発展を図るため、区内産業三団体(東京商工会議所杉並支部、杉並区商店会連合会、杉並産業協会)と同じフロアに設置した区の産業振興部門です。それぞれの団体と連携しながら、商店街や中小企業の支援、勤労者福祉事業、都市農業の振興など、区内産業の活性化に向けた取り組みを行っています。

- 主な取扱業務
- 中小企業資金の融資あっせん、商工相談
  - 就労支援、創業支援
  - 中小企業勤労者福祉事業
  - 商店街の各種支援事業
  - 観光事業の推進、アニメの振興
  - 特定商業施設に関する届出
  - 都市農業の振興、区民農園の管理

すぎなみ産 2017年10月発行  
企画・発行: 杉並区産業振興センター  
〒167-0043 東京都杉並区上荻1-2-1 インテグラルタワー2F  
TEL.03-5347-9077(中小企業支援係)

**杉並産業協会**  
〒167-0043 杉並区上荻1-2-1 インテグラルタワー2F  
TEL.03-3220-1231

杉並区内の法人および個人を中心とした事業主で組織運営されている唯一の産業団体です。労働保険事務組合として労働保険の取り扱いも行っていきます。会員企業には労働保険事務組合への加入の他にも従業員福利厚生のための健康診断、レクリエーションの企画や事業主の皆様には優良工場見学、講演会、賀詞交歓会等開催等を行っています。

- 主な取扱業務
- 関係官庁に対する届出書類の記入代行・指導
  - 労働保険事務組合の運営
  - 講演会・交流会の開催
  - 団体への表彰者の推薦
  - 会員企業に勤める従業員の方への福利厚生事業
  - 会報の発行
  - 会員間の親睦事業

制作: 杉並産業協会  
クリエイティブ・ディレクター/アート・ディレクター: 岸部浩三  
ライター: 大西洋平  
エディター: 三坂輝  
カメラマン: 豊田佳弘(表紙:p1~6)  
イラストレーター: 柿崎えま

登録印刷番号  
29-0052

すぎなみ産 発刊にあたって

## 杉並の仕事は面白い!

約20,000の事業所と、その仕事。

「すぎなみ産」は、杉並区に産まれた仕事を集めました。

自然と生活が混じり合う、暮らしやすいこの街に、

多種多様な産業は結びついています。

面白がって、面白い。

好きなことを楽しんでやって産まれた身近な物事。

杉並発の産業は、こんな顔立ちでした。

杉並の仕事は面白い!

